

教養と専門（学部と修士）

丹保 憲仁

土木学会名誉会員、論説委員長

北海道大学・放送大学名誉教授、中央大学研究開発機構教授

大きく変転するこの時代では、大学で最初に勉強したことに、実務経験を個人的に加えるだけで、生涯にわたり仕事をやり遂げることのできる人は少ない。研究者、学者でさえ、サバテカル・リーブ（大学教室の長期有給研修）がシステムとして保証されていない日本では、教授になっても失速してしまったりする。

学部教育は、第一サイクルの高等教育であり、大学院は第二サイクル以降を主として担う高等教育である。もっと、乱暴に言えば第一サイクルの学部教育の主体は教養教育と導入的な基礎教育で、第二サイクル以降に繰り返されるのが専門教育であり、大学院修士課程教育がその主体を担う。研究はもちろん第二サイクル以降の博士課程に至る重要機能である。社会と個人が歴史を重ねていく過程で学部レベルでの繰り返し学習も必要になるが、その際にはほとんどの人が社会人としての何らかの役割を日々担っていることから、学部レベルの生涯教育では、何時でも、何処からでも学び始められる、“open university 型”（放送大学がその典型的な例）高等教育の充実が求められる。

高校生や大学低学年の学生が、時には中学生までも「是を勉強したとしても何の役に立つかが判らない」と称して、日々の学びに入れぬ輩が多くなってきているらしい。歩き方と自分の居るところが判らなければ、動物の仔はあつという間に他の肉食獣の餌食である。初中等教育では教科書型の訓練重視の勉強をさせるのは、その意味である。個体発生は、系統発生を繰り返すと中学生（旧制）の頃習ったことがある。人類は文化・文明なるものを数千年以上にわたって情報として社会に蓄えてきた。個体の成長は高々数十年のものである。個々の肉体は百年で滅びる。自分が正しいと思うかどうか、行動の判断基準であることは間違いないが、人類数千年の試行錯誤の学習成果を系統的に学ばずに、自分の DNA に痕跡的に潜在している情報と個人の短日時の経験のみで事を進めるのは危うい。学ばなければ食われてしまう動物の世界よりも、学ばなければ無視されかねない人間社会のほうが、結果がすぐには見えないだけにもっと怖い。

学部教育の中核は教養学である。自分は何処にいるのか、何処からきたのか、何処へ行くのか、自己の立位置を確かにすることが教養を学ぶ大きな目的と思う。近代を作ったヨーロッパ、今生きているアジア文明の起源から始まる時間軸の理解を歴史に学び、地球から宇宙に広がる人間の空間認識と人間がそれらを理解する営為としての科学的素養、そして動物として、また、きわめて特異な地球上の卓越種としての人間自身の心と挙動の理解など学ぶべきものは多岐にわたる。特に、はびこりすぎた人類の今を学び、未来を想像し、子孫に思いをはせる「人類が持続できるかどうか（sustainability）」を中心に、長く広い時空間の上で今を学ぶことが大切であろう。現代の教養学とこの間までの教養学は少し違うように思うが、第一サイクルの高等教育を現代教養学として学びはじめ、その後何かを始めることとしなければならないと思う。

何かを行動的に具体的に学び始めるのは、たぶん学部の最後の頃に練習的にほんの少し、そして本格的には大学院で始める創造的な専門教育（学習）であろうと思う。専門教育（学習）はその成果を世に返して、自身や家族を養う為の対価を社会から頂く生業の基であり、世の役に立つから、世間から報酬がもらえるわけである。もちろんそれが個人の生きがいであり、個人の位置を確認補強し、自身の位置決めをより確かにすることにもつながる。多くの場合、高次の生きがいを生むのもこのサイクルである。その意味で専門が自己の教養充実につながる事を実感できる人は幸いである。

学部4年間で完成教育型の学部学科制に押し込め、学年制の既成カリキュラムを無理やり学ばせるのは、人生80年を学び続けることが必要とされる時代（learning society）の第一サイクルの高等教育課程としては、堅苦しすぎて、全面的に意義を感じてくれる学生も少なからうと思う。大学院までを広く高等教育と考え、学部の教育課程を基礎訓練と文化・文明理解の手ほどきの両面からみて、バランスの取れた逐次習得型の学習ツリーとして提示しなければなるまい。いくつかの枝があってもよいが、枝をたどれば順次に先へ進む明確な逐次性が重要である。

大学院が大きな割合で広く高等教育に参入して来るこの時代に、自分の位置決めを重要課題とする学部教養教育と基礎教育、個々人の生業を世に認めてもらう大学院専門教育を、継続教育・繰返し学習課程として論ずる必要がある。大学院教育は目的指向の個別プログラム型であり、学部教育は大学の特性を学生・教員が地域と共に創成する自己陶冶（位置決め）型（教養）教育である。学部（BS）と大学院修士課程（MS）の課程は、4+2年もよし、3+3年もまた意味のある切り方であるように思う。PhDもその先にある。教養教育、基礎課程の本格的な修練を欠いたプログラムのみの職業教育は十全でない。

参考文献) 丹保憲仁：「大学院教育の実質化」、大学評価研究、第6号、2007年7月 pp6-13、大学基準協会